Osaka University Knowledge Archive

Title	宮崎市およびその周辺の中・若年層の談話音調 : 男性話者の事例とそのモデル化
Author(s)	郡, 史郎
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2024, 2023, p. 13-40
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/97365
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

宮崎市およびその周辺の中・若年層の談話音調

― 男性話者の事例とそのモデル化 ―

郡 史郎

要旨　宮崎市の中･若年層の話者の談話音調の実態を1990年生まれの男性話者１名の事例で検討した。結果として，明治・大正生まれの世代と基本的なしくみは同じだが，とくに文節の末尾での高さの動きに上昇下降や下降の動きがあり，それが文法的・語彙的な働きをしているなどの特徴が生じていることを述べるとともに，この話者の談話音調の大枠を説明するための暫定的なモデルを提示する。

1　はじめに

「無アクセント方言」と呼ばれる方言では，「橋」「箸」「端」あるいは「着る」「切る」などの単語の違いを音の高さの動きで区別せず，どの単語もさまざまな音の高さの動きとともに使われうる。こうした方言は東北地方南部から北関東にかけての地域や，九州の西北部から東南部にかけての地域などにあり，話者の数も少なくないが，会話の中での音の高さの動き（談話音調）はまったく自由というわけではなく，一定の規則にそった高さの動きの使われ方がなされていると思われ，またそこに地域ごとの特色もあるようだ。

そうした高さの動きの実態とそれを定める規則を知るための研究の一環として，筆者はこれまで宮崎市およびその周辺の２地点（ともに現宮崎市の清武地区と青島地区）について，現在入手できるもっとも古い明治・大正の生まれの話者による会話資料（「清武談話」と「青島談話」）を用いて実態の分析をおこなってきた（郡 2022, 2023）。その結果は以下のようにまとめることができる。

①会話の中での声の高さの動きは，文節ごとの高さの動きの方向性として単調下降型（略称「下降型」），単調上昇型（略称「上昇型」），平坦型という３種の「音調型」と，その上にかかる形で文節の冒頭や末尾にあらわれる上昇または下降という「境界音調」に分解できる。

②境界音調の種類とその使用頻度は会話資料によって違いがあり，地域差または個人差があるようだ。境界音調として清武談話」は文節の最後での段上昇（末尾上昇）と文節の冒頭での上昇（冒頭上昇），青島談話ではそれに加えて文節の末尾から次文節の冒頭にかけての下降（末尾下降）を認定した。

③２地点で全５名の話者のうち平坦型が多い青島の男声話者１名以外は，各文節はもっぱら下降傾向ながら，ときには平坦に，そしてときには上昇傾向で発音され，それらの末尾や冒頭に上昇または下降が適宜つく形になっている。

④終助詞類と間投助詞は固有の高さの動きを持つ。

⑤高さの動きを左右する要因として意味の限定関係とフォーカス，感情がみとめられるが，音調型と境界音調の選択には高い自由度もある。

2　本稿の目的

本稿では，当該地域の現在の談話音調について，1990 年生まれの男性話者 1 名（以下「現役世代の男性」と呼ぶ）の事例を検討した結果を報告し，明治・大正生まれの世代とは高さの使い方が変わってきていること，とくに文節の末尾の高さの動きに特徴があることを述べるとともに，この話者の談話音調の大枠を説明できそうなモデルを提示する。

今回の話者はいわゆる「平成の大合併」以前の旧宮崎市の生育であり[1]，会話を収録した 2011 年当時は大学生で，大阪に居住していた。会話の相手は宮崎県生育だが小学校中学年から宮崎市居住という同大学同学年の男性の友人だが，本稿では旧宮崎市生育の話者についてのみ分析した結果を報告する。収録は 2011 年 1 月に大阪の大学の研究室でおこなった。全部で約 1 時間の会話のうち，年末年始の帰省時の様子と高校時代の様子を話題とする 36 分半を分析の対象とした。なお，この話者については，種々の言語的要因をコントロールした短文の読みあげ調査もおこなっている。その結果の一部も今回の談話の分析結果の解釈に利用する。

談話内でのこの話者の発言は，同世代の他の話者と同様，全国共通語色がかなり強い。日向方言らしい文法形式や語彙は，指定の助動詞チャ・ヤ（のだ・だ），継続進行のチョル，否定のン，助詞カイ（から），終助詞ト・ツ（の），形容詞ネー（ない）があらわれる程度である。しかし，チャとヤが，チャワ，チャガ，チャネ，チャケド，ヤッタなどの形で多く使われており，無アクセント性[2]と独特の談話音調とあいまって宮崎らしさもよく感じられる。高さの動きは全般に小さい。

3　高さの動きのとらえかた

前 2 稿で扱った明治・大正期の生まれの話者の高さの動きは，先述のとおり，文節ごとの方向性として下降型，上昇型，平坦型という「音調型」と，その上に乗る形で文節の冒頭や末尾

---

1) 岩本実(1983)の方言区画では前 2 稿で扱った清武地区と青島地区は，前者が日向の中部方言に，後者が南部方言に分属されている。これは 1896 年までの所属が宮崎郡か北那珂郡かの違いに対応したものと思われる。その意味では今回の話者の生育は旧宮崎郡地域，すなわち岩本の言う中部方言地域にあたる。

2) 単語にきまった高さの動きがないことを示す例を談話の実例からいくつかあげる：イロイロ，ギリギリが下降型でも平坦型でも発音，オボエテ（覚えて），ダカラが下降型でも上昇型でも発音，チャントシタ，トナリガ（隣が）が平坦型でも上昇型でも発音。

にあらわれる上昇または下降という「境界音調」の組みあわせで音声的に記述できた。この現役世代の男性話者の談話でも基本的に文節が高さの動きの単位になっているようなので，まずは文節ごとに高さの動きを見てゆくこととする[3]。

ただし，今回扱う現役世代の話者には文節末にさまざまな音の動きが見られ，それがこの話者の大きな特徴になっている。

本稿ではこの話者の境界音調として次の５種類を考える。(1) は文節の冒頭の動き，(2)〜(4) は文節の末尾の動き，(5) は文節境界の前後，すなわち末尾から冒頭にかけての動きである。

(1) 文節の冒頭を一段高くする「冒頭上昇」

(2) 文節の末尾を一段高くする「末尾上昇」

(3) 文節の末尾の母音を伸ばしながら一段上げてすぐ下げる「末尾上昇下降」

今回の現役世代の男性の談話ではじめて導入する。

(4) 文節の末尾を一段低くする「末尾降下」

この現役世代の男性の談話ではじめて導入する。まぎらわしくて恐縮だが，郡(2023)で青島談話の境界前後にわたる下降に対して「末尾下降」と仮称した動きとは性質が異なるので，青島談話で「末尾下降」と仮称したものは今回「境界下降」と呼びかえることとする（次の(5)）。

(5) 文節の末尾から次文節の冒頭にかけて文節境界を越えて下降する「境界下降」。

末尾音調について

上にあげた境界音調のうち (2)〜(4) は文節の末尾の動きなので，この３つをまとめて「末尾音調」と呼ぶことにする。これらは，「末尾上昇＋末尾降下」，あるいは「末尾降下＋末尾上昇」，「末尾降下＋末尾上昇下降」，「末尾上昇＋末尾降下＋末尾上昇」という複合形で使われることもある。

末尾音調のほとんどは助詞，ときに助動詞にともなうものなので，それらについては「助詞・助動詞の音調」と考えることもできる。実際，カッケイ┐カ┌ナー┐ト（格好いい＋か＋な＋と：┐で末尾降下，┌で末尾上昇をあらわす），コトーヤ┐カイ┌ネ（孤島だ＋から＋ね），ウマッチョッタ┐カラ∽サー（埋まってた＋から＋さ： ∽で末尾上昇下降をあらわす）のように助詞ごとに別の末尾音調がついていることがある。また，カエッタッチャ┐ケ┌ド（帰ったんだけど），ヤス

3) 下降率が大きい下降型が有アクセント方言のようなアクセント下降を持つかのように聞こえたり，下降率が小さい下降型や平坦型が有アクセント方言のような平板型アクセントであるかのように聞こえることはよくある。有アクセント方言であれば単語や文節のどこかに下がり目（˙）や上がり目（´）をつけることで談話音調を表記することが一応できるが，それをこの宮崎の談話音調にあてはめるのは無理がある。それは，あとに示す図１〜５などからも理解されると思うが，かりにそのような表記をしたとしても，その表記から想像される高さの動きは現実とはかなり違うものになるだろう。

イ「ラ┐シー（安いらしい）のように２音節以上の助詞・助動詞の内部で上昇したり下降する場合もある。

この助詞・助動詞ならこの音調というようなきまった対応関係は，部分的には存在するが（5.5.2 節で述べる），自由度も高い。自由度の高さは無アクセント方言ゆえであろう。

なお，さきに音調型と境界音調の説明で「文節ごとの方向性」「文節の冒頭や末尾（の高さの動き）」のように書いたが，実は複合語などでは要素ごとに独立の動きの方向が存在することがある，すなわち２つ以上の音調単位が存在することがあるので，厳密には「音調単位ごとの方向性」「音調単位の冒頭や末尾（の高さの動き）」ということになる。前２稿でもいちいち断っていなかったが，同様である。

４　音調型と境界音調

音調型と境界音調の高さの動きの詳細は以下のとおりである。

●単調下降型：略称「下降型」

分節音の影響によるでこぼこはあっても，それを捨象するとおおむね単調に下がる動きになっているもの。１秒で２半音程度以上の割合で低くなるもの，聴覚的にも下降が感じられるものとする。

なお，文節の最初で下降度が大きく，そのあとゆるやかになる場合がある。本稿では，最初の下降が明らかに大きく，しかもその下降が前文節の末尾から始まっているものについては「境界下降＋下降型」の組み合わせと考えた。この考え方を前２稿にあてはめると分類結果が若干変わると思われるが，その検証はだおこなっていない。

●単調上昇型：略称「上昇型」

分節音の影響によるでこぼこを捨象するとおおむね単調に上がる動きになっているもの。

●平坦型

分節音の影響によるでこぼこはを捨象するとおおむね平坦な動きになっているもの。

●文節の冒頭を一段高くする「冒頭上昇」（図１，２，３参照）

●文節の末尾を一段高くする「末尾上昇」（図３参照）

一段高くなったあとその高さをおおむね保持するタイプの上昇で，東京方言の末尾音調についての筆者の分類では「強調型上昇調」と呼んでいる（郡 2020a）。東京方言などの疑問文末にあらわれるような直線的に上がりつづけるタイプの上昇（郡 2020a の「疑問型上昇調」）も出てくる。具体的には，カエッ↗タ（帰った？），シチョッ↗タ（してた？），アイチョッ↗タ（空いてた？），ナクナランカッ

↗タ（なくならなかった？），イーンジャ↗ナイトカ（「いいんじゃない」とか），アト ニホンシュ↗イチゴーグライー ノンデ（あと日本酒１合ぐらい飲んで：いわゆる「半疑問」）などである。ただし，その使用は文末か特殊な用法に限られるので，境界音調には含めないでおく。

末尾上昇で高くなるのは末尾の１音節のことがほとんどだが，助詞のない文節の末尾音節の場合もある。また，タラ，クライのような助詞全体が高くなる例もある。助詞の前での上昇も１例ながらある。具体的には「現代社会とかを」の「社会」の最後のイ（図３参照）。

●文節の末尾の母音を伸ばしながら一段上げてすぐ下げる「末尾上昇下降」（図５参照）

副詞節や並列節の末尾のテ・デなどの助詞・助動詞の最後の音節での上昇下降，つまり現代の東京などのいわゆる「尻上がりイントネーション」と同じ音形である。この話者にはかなり頻繁に見られる。

なお，カラ，タラのような２音節の助詞・助動詞で，先述の末尾上昇の後にさらにこの末尾上昇下降が続くように見える例がある。しかし，これは末尾上昇下降の上昇が助詞・助動詞の冒頭からはじまると考えればじゅうぶんであろうから，末尾上昇と末尾上昇下降の連続は見ないでおく。

●文節の末尾を一段低くする「末尾降下」（図２，３，４参照）

この動きは，引用のテ・ト，ケド，クライのような助詞全体で，またカラ，グライ，ミタイナのような２音節以上の助詞や助動詞の内部で，あるいはニワ（には）など複合助詞の最終要素で見られる。

イケルッチャワー，ナンヤロネのような日向方言に特徴的なチャ，ヤは直前より低くつくことがよくああるが，これも「末尾降下」と本稿では考える。

●文節の末尾から次文節の冒頭にかけての「境界下降」（図３，５参照）

これは「清武談話」にも少数観察され，「青島談話」にはかなり多く出てきたもので，郡（2022）では「末尾下降」と仮称した。今回の話者にも多く見られる。

以上のカテゴリーにはいらない動きとして，東京方言などのアクセントの下げのような急で大きな文節内部の下降（˜）が少数ながら見られた。それに先立つ上昇を記号 ˊ であらわすと，オˊリ˜タ（降りた［瞬間に］），シンドˊ˜クナイ（しんどくない？），マˊケ˜タ（負けた），コミュニケーションˊガ˜イロントカ（コミュニケーション概論とか），イˊネ˜ーモンネ（いないもんね），ヤˊバ˜イト（やばいと［思ったけど］）である。このうち最後の例は引用の助詞の末尾降下を先取りしたものかもしれない（4.5.2 節参照）。

すでに述べたように高さの動きを分類する単位として文節を手がかりとするが，その際，前２稿と同じく補助動詞をその直前とあわせて１文節をなすと考えた。補助動詞や複合語の各要素が音調的な独立性を持っていることがあるが，それについては 5.5.1 節で述べる。

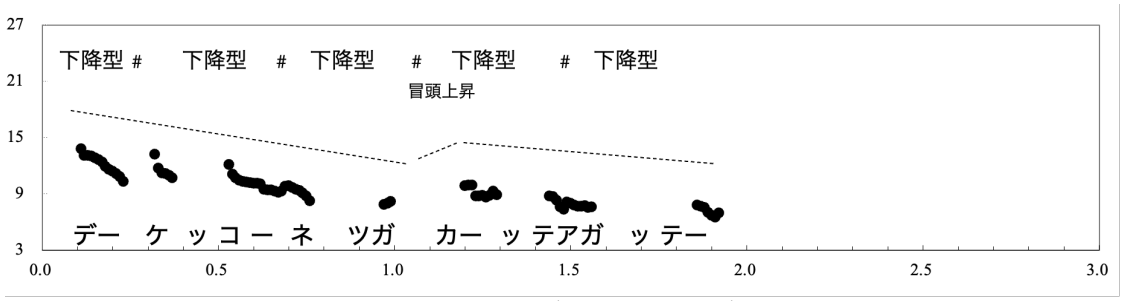

図１「で，結構熱がかーっと上がって」

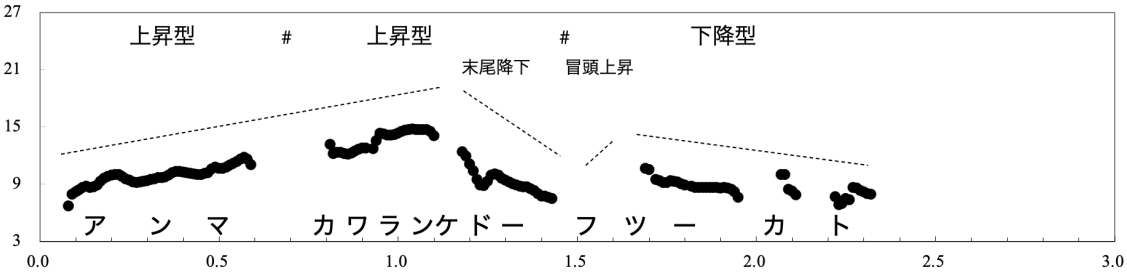

図２「あんま変わらんけど，普通科と」

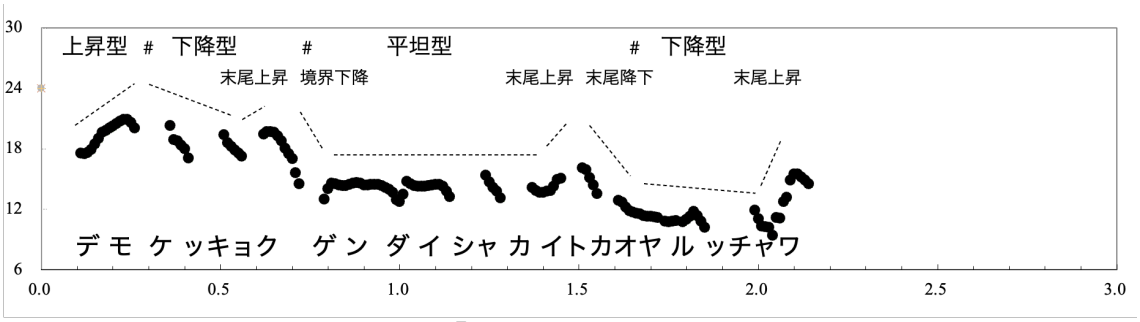

図３「でも結局『現代社会』とかをやるっちゃわ」

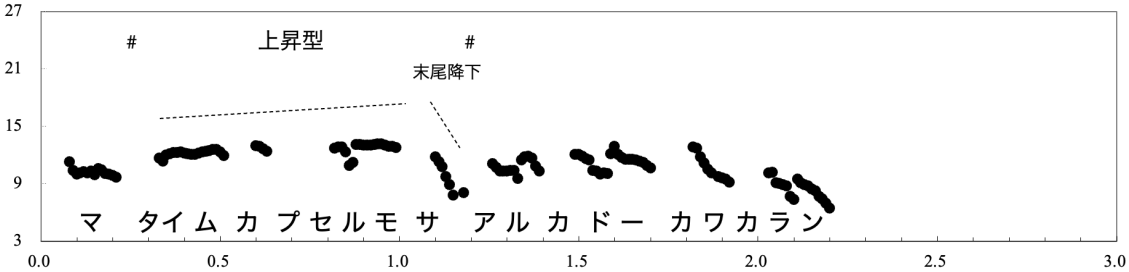

図４「ま，タイムカプセルもさ，あるかどうかわからん」

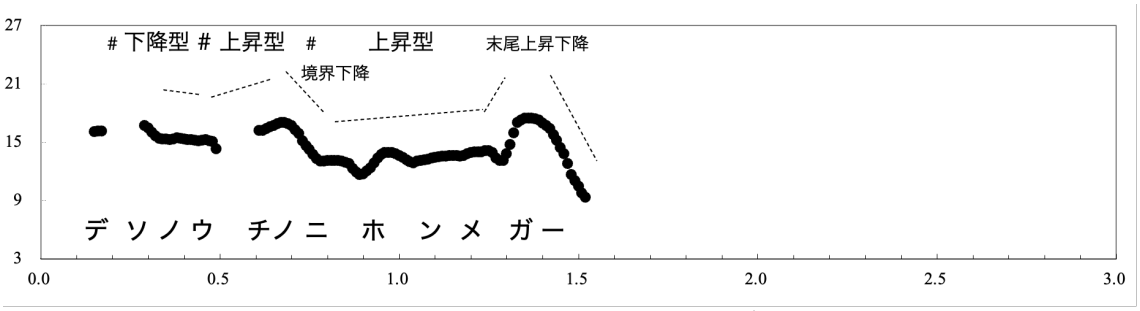

図５「で，そのうちの２本目が」

音調型と境界音調の分類は Praat を利用した音響分析と聴覚を併用しておこなったが，文節が短い，あるいは音量が小さい，会話相手の発言とかぶるなどの理由で音調型が判断できない場合は「判断保留」とする。

この話者の典型的な高さの動きを５例，図１以下に示す。図では縦軸が高低をあらわすが，目盛は 50Hz を基準(0)とした半音値で，人間の通常の声域をほぼカバーする 24 半音分（2 オクターブ）を示している。横軸は時間で，目盛は秒である。

5　談話全体の高さの動きの特徴

以下では，前２稿と同じく，ふたつ以上の文節が間にポーズをはさまないで続いている発言をとりだし，その各文節の音調型とその組み合わせの特徴を検討する。話し相手の声との重畳の分離がむずかしい箇所や音高の正確な観察が困難な箇所は検討対象からはずす。結局，ポーズでくぎられるポーズ段落の数で言えば 240，そこに含まれる 931 文節を検討対象とした。

5.1 音調型の数から見た特徴

本稿では各文節での高さの動きの方向性を３つの音調型に分けているが，ひとつの文節が複数の音調型からなると判断した場合がわずかだがある（全体の 3%）。それについては別に考察することとし，まず１文節が１音調型の 902 例について検討する。

各音調型の割合は，下降型が 53%，上昇型が 18%，平坦型が 17%で（図６），３つの音調型のなかでは下降型が多い。ここには境界音調が加わった場合も含めているのは前２稿と同様。下降型が他より多いことも前２稿の明治・大正生まれの話者と同様である。

上昇型が 18%あるが，これは清武と青島の明治・大正生まれの 10%前後より多い。

郡(2023)は明治・大正生まれの話者について下降型と平坦型をあわせた割合が一定であることから両音型が変異形の関係にある可能性に触れたが，本稿の話者の場合，意味の限定関係との対応や境界下降の出現分布から見ると，むしろ平坦型と上昇型が近い可能性もある。

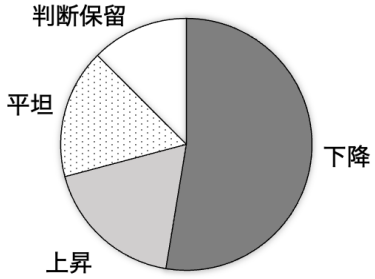

図６　音調型の割合

5.2 それぞれの音調型の使われかた

次に，文内や談話内での文節の機能に応じた使い分けの有無をさぐるために，前稿と同様，その文節が提題文節であるかどうか，そして副詞節，並列節といった「節」の末尾であるかどうか，文末であるかどうかということと音調型の使用割合の関係を検討する。さらに，ポーズ段落内の位置，つまりポーズを置いたあとの発言の最初の文節であるか，最後であるか，それ以外かについても検討する。

5.2.1 提題文節との関係

助詞のワ（は）がついて文の主題の働きをする提題文節とそれ以外の文節における各音調型の分布（実数と割合）を表 1 に示すが，提題文節では上昇型がいちばん多く，全体の半数を占めている。提題文節以外と比べても，上昇型が多く，下降型が少ない[4]。清武談話でも青島談話でも提題文節かどうかで使われる音調型の割合が異なるということはなかったので，これは今回の現役世代の話者の特徴と言える。なお，表 1 では，残差分析をおこなった結果，統計的有意なかたよりがあると判断される項目のセルを網掛けで示し，負の方向へのかたよりがある項目を数値への下線で示す（以下の表でも同様）。

ただ，実例を見ると，上昇型の提題文節の場合，実際は「X は Y だが，他は違う」のような対比の意味で使われているものである（5.2.5 節で述べる）。

5.2.2 節末での使われかた

次に，文法的な切れ目の大きさとの関係を見るために，文末ではない文節で，後続文節との間の文法的な切れ目が相対的に大きなもの，すなわち副詞節（条件節含む）または並列節の末尾にある場合，具体的には「から」「けど」「たら」「て・で」がついた文節の各音調型の使われかたを検討する。

表 1　提題文節と音調型の割合との関係

	提題文節		その他の文節	
下降型	12	34%	463	53%
上昇型	17	49%	148	17%
平坦型	5	14%	145	17%
判断保留	1	3%	111	13%

4) 提題文節であるかどうかで下降型・上昇型・平坦型の 3 型の使用割合に差があるかについて正確確率検定をほどこすと $p<0.001$ で統計的に有意 ($p<.05$) な差があると判断される。残差分析の結果では，調整済み標準化残差は下降型が -3.023 ($p<0.01$) と提題文節で有意に少なく，上昇型が調整済み標準化残差 4.269 ($p<0.001$) と提題文節で有意に多い。

表２ 節の末尾と音調型の割合との関係

	副詞節・並列節の末尾の文節		その他の文節	
下降型	51	65%	424	51%
上昇型	9	12%	156	19%
平坦型	11	14%	139	17%
判断保留	7	9%	106	13%

表３ 文末と音調型の割合との関係

	ポーズ前の文末		ポーズ前の非文末	
下降型	54	75%	98	69%
上昇型	3	4%	10	7%
平坦型	5	7%	19	13%
判断保留	10	14%	16	11%

結果をまとめたのが表２だが，副詞節または並列節の末尾かどうかで音調型の使われ方が異なるということはなさそうである[5]。

5.2.3 文末での使われかた

次に，述語として文法的な文末になっている文節かどうかで音調型の使われかたに違いがあるかどうかを見る。条件をそろえるために，直後にポーズがある場合にかぎって比較をおこなう。また，疑問文の末尾は除外する。

結果をまとめた表３からわかるように，文末か文末でないかによる音調型の使用率に違いはない[6]。

なお，疑問文の末尾については，11 例のうち６例は下降型で，さらにそのうち２例が最後に疑問形上昇イントネーションがつく形になっており，２例が上昇型，３例を判断保留とした。

5.2.4 ポーズとの関係

今見た表３を音調型の全割合を示した図６と比べると，形式的な文末であるかどうかにかかわらずポーズの前では下降型が多いように思われる。そこで，こんどは形式的な文末か否かにかかわらずポーズの前かどうかということ，あわせて，ポーズの後かどうか，あるいはそのどちらでもないか，すなわちポーズでくぎられるポーズ段落の中での位置と音調型の関係について見てみた。

---

5) 下降・上昇・平坦の３型の使用割合について正確確率検定をほどこすと p=0.132 と，節末かどうかで使用割合に統計的に有意な差はないという結果になった。

6) 下降・上昇・平坦の３型の使用割合についておこなった正確確率検定では p=0.325 と使用割合に統計的に有意な差はない。

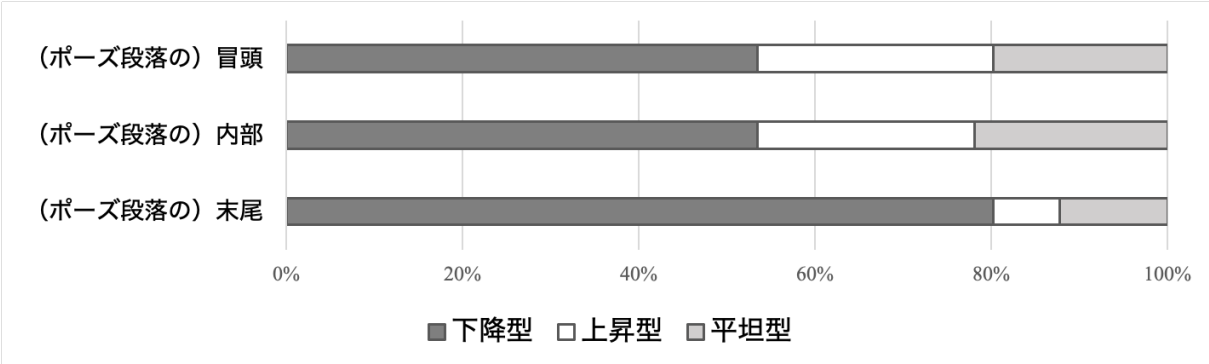

図７ ポーズ段落内の位置ごとの音調型の割合

結果をグラフ化したのが図７だが，ポーズの前でのみ下降型が顕著に多いことがわかる[7]。

ここから，ある文節の直後にポーズを入れようとするときは，その文節の主音型を下降型にするという方策が使われているということが言えそうだ。なお，この集計では境界音調のことは考慮していないので，ポーズ前は低いという話ではかなずしもない。

ただし，ポーズの前でなくてももっとも多いのは下降型である。すると，下降型が基本音型であり，上昇型や平坦型はポーズ前ではないところで使われるものと考えるのがよいかもしれない。

5.2.5 上昇型の意味

前２稿で，感嘆や驚きなどの気持ちを込めた発言では大きな上昇型の使用がめだつことを述べた。今回の現役世代話者には感嘆や驚きなどの気持ちを込めた発言自体がほとんどないためと思われるが，そうした傾向は強くは感じられない。それでも，図８に示す デ シカモ サイキテ ナンモ［上昇型］ ネッチャワ ホントニ ナンーニモ［上昇型］ ナクテ（で，しかも佐伯［の駅前］って，なんにもないんだよ，ほんとに，なんにもなくて）のような感情が込められた例はある。そして，この話者としては非常に大きい上昇のしかたになっている。

今回の現役世代の話者の上昇型は，5.2.1 節で述べたように提題文節での使用が多いが，個別の発話で特徴的なものとして目につくのは，提題文節でも対比の「は」を含む文節に上昇型が使われ，それに下降型が続く例，そして強意の副詞や助詞を含む文節に上昇型が使われ，それに下降型が続く例である。

---

7) ポーズ段落内での位置によって３つの音調型の使用割合に差があるかについて正確確率検定をほどこすと $p<0.001$ で統計的に有意な差（かたより）があると判断される。つまり，均質な分布ではない。残差分析の結果では，調整済み標準化残差と有意確率は冒頭・下降型 -2.126 ($p=0.034$)，冒頭・上昇型 2.253 ($p=0.024$)，冒頭・平坦型 0.319 ($p=0.750$)，内部・下降型 -3.942 ($p<0.001$)，内部・上昇型 2.662 ($p=0.008$)，内部・平坦型 2.162 ($p=0.031$)，冒頭・下降型 6.643 ($p<0.001$)，冒頭・上昇型 -5.289 ($p<0.001$)，冒頭・平坦型 -2.811 ($p=0.005$) であり，内部・平坦型以外すべて有意にかたよった分布になっている。

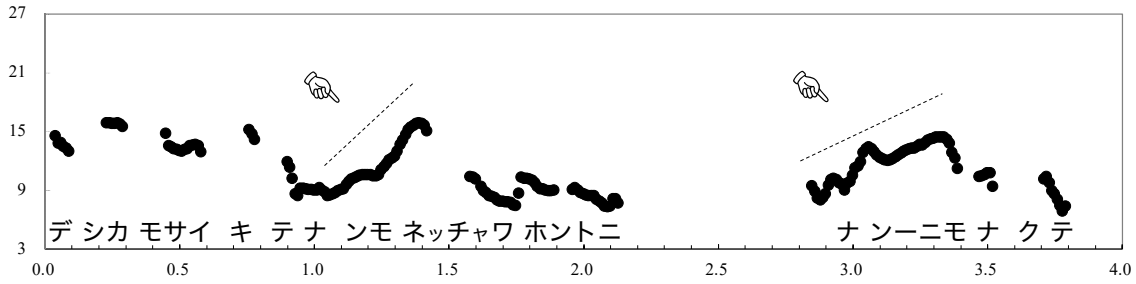

図８ 感嘆や驚きなどの気持ちを込めた発言における上昇型

前者の例として，サイキマデワ［上昇型］ カンタンニ［下降型］ イケルッチャワー［下降型］（佐伯までは簡単に行けるんだ［しかし佐伯から先が困る］），クル［上昇型］ ヒトワ［上昇型］ イーケド［下降型］（来る［だけの］人はいいけど［企画側は大変］），ネツワ［上昇型］ サガッタケド［下降型］（熱は下がったけど［咳が出る］）がある。後者の例としては メッチャ［上昇型］ ミズガ［下降型］ デテキテー［下降型］（すごく熱が出てきて），ゼンゼン［上昇型］ カワラン［下降型］（全然変わらない），チョット［上昇型］ ヒドカッタネ［下降］（ちょっと［=とても］ひどかったね），サンボンシカ［上昇型］ ネーッチャワ［下降型］（３本しかないんだよ）がある。図８に示した例も後者に含めることができる。つまり，対比を含め，強調の意味が加わる文節で上昇型が使われている例が目だつ。

5.3 音調型の連続に見られる特徴

5.3.1 組み合わせの傾向

連続する２文節における音調型の組み合わせを，間に境界音調がない場合（ポーズで前後をはさまれたポーズ段落にある全 691 の２文節連続中 235 例）だけについて集計しグラフ化したのが図９である。

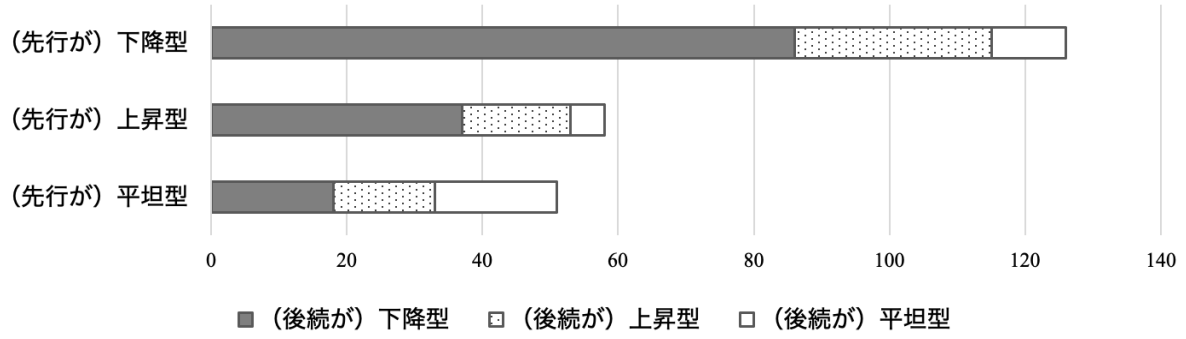

図９ 連続する音調型の組みあわせ（間に境界音調がない場合）

ここから，平坦型には平坦型が続く例が相対的に多く，下降型が続く例は相対的にすくないことがわかる[8]。

5.3.2 ２文節が１音調句になる場合

２文節が１音調句になるというのは，ある型の文節のあとに境界音調なしにそのまま同じ型の文節が続く場合とここでは考える。そのようなひとつの音調句を形成する例が，ポーズで前後をはさまれたポーズ段落にある２文節連続（691 例）の中でしめる割合は，「下降型＋下降型」20%，「上昇型＋上昇型」3%，「平坦型＋平坦型」4%だった。あわせると２文節連続全体のうち 27%になるが，これは清武談話の 21%，青島談話の 23%と同程度である。

・音調型の組みあわせに見る意味的な制約（意味的限定）

上のような形で２文節が１音調句を形成する要因として，前２稿では文節間の意味的な関係，つまり最初の文節（たとえば「白い花が」なら「白い」）がそれに続く文節の中核となる自立語（「花」）を意味的に限定しているかどうかに着目し，それが清武談話でも青島談話でも１音調句を形成する要因になっていると考えられることを示した[9]。

今回の現役世代の話者についてもそれはあてはまる。意味的な限定関係がある全 307 例（述語文節とその直前の例を含む）の２文節連続のうち，１音調句になっている割合は 28%である。これに対し，意味的な限定関係がない全 384 例の２文節連続が１音調句になっている割合は 9%だった。つまり，２文節が１音調句になる割合は，その文節間に意味的な限定関係がある場合が，ない場合の約３倍高い[10]。

この関係を，２文節が１音調句になっている場合といない場合のそれぞれでの意味的な限定関係の有無の割合になおしてグラフ化したのが図 10 である。１音調句のうち 72%が限定関係のあるものになっており，これは青島談話とも清武談話ともほぼ同じレベルの割合である。

なお，上記の定義による音調句にはあてはまらないが，途中に境界音調をはさまない「平坦型＋上昇型」の連続 15 例のうち 10 例に意味の限定関係があり，平坦型と上昇型の類似性を感じさせる（「上昇型＋平坦型」の連続５例については２例に意味の限定関係あり）。

---

8) 音調型の組み合わせかたに差があるかについて正確確率検定をほどこすと $p<0.001$ で統計的に有意な差（かたより）があると判断される。残差分析の結果では，調整済み標準化残差と有意確率は先行文節が下降型の場合, 後続文節が下降型, 上昇型, 平坦型がそれぞれ 2.777 (p=0.005), -0.951 (p=0.342), -2.688 (p=0.007), 先行文節が上昇型の場合，0.679 (p=0.497), 0.413 (p=0.679), -1.459 (p=0.145)，先行文節が平坦型の場合，-4.070 (p<0.001, 0.718 (p=0.473), 4.778 (p<0.001)。本文で述べた以外に，下降型には下降型が続く例が多く，平坦型がすくない点が有意。

9) 意味的限定については郡(2020)参照。「白い花」「ベートーベンの運勢」「楽しんで働く」には２文節間に意味的な限定関係があるが，「白い雪」「ベートーベンの『運命』」「起きて働く」にはない。

10) 意味的限定関係で音調句になるかどうかの差があるかについて正確確率検定をほどこすと $p<0.001$ で統計的に有意な差があると判断される。

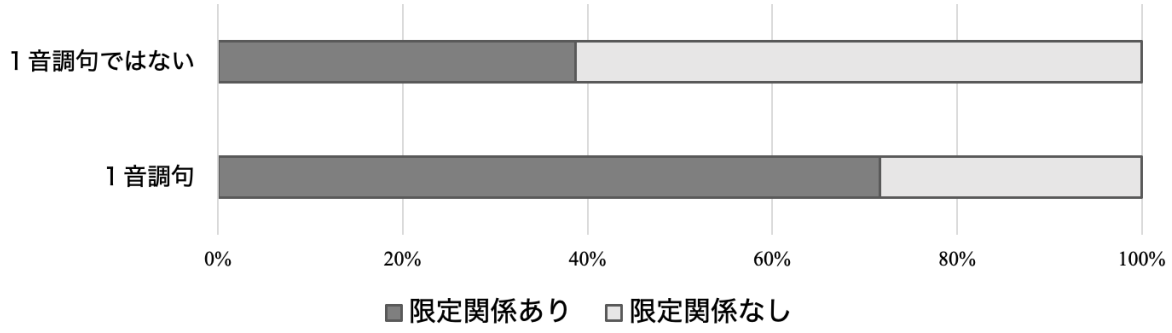

図 10 意味的な限定関係と音調句

以上のように意味的限定の有無がイントネーションを左右する要因になっており，意味的限定があれば音調句としてまとまりやすいことがわかる。ただ，その割合が 28%というのは大きくはない。これは清武談話の 47%より小さく，青島談話の 31%と同レベルである[11]。

・フォーカス

郡(2023)で検討した青島談話では，音調型の組みあわせに見る意味的な制約のひとつとしてフォーカス（訴えかけの焦点：文の中で伝えたいという気持ちが特に強い語句にはフォーカスがあるとする）をとりあげ，フォーカスがある文節とその後を含めた全体が 1 音調句になる例の存在を指摘した。しかし，今回の現役世代の話者ではそのような例は認められなかった。むしろ，フォーカスについては 5.2.5 節で述べたように，フォーカスがある文節が上昇型をとり，それに下降型が続く「上昇型＋下降型」の例が目立った。

5.4 境界音調

5.4.1 冒頭上昇

文節冒頭の上昇と認定した動きは全文節の 28%にあるが，表 4 にまとめたとおり，冒頭上昇はその文節が上昇型の場合は顕著にすくない。上昇型につく場合がすくない分，下降型と平坦型につく場合が相対的に多くなっている[12]。

---

11) 東京方言では 2 文節の連続において先行文節が後続文節の中核となる語を意味的に限定する場合，話者の内省や短文の読みあげでは後続文節のアクセントは「弱まる」。具体的には先行文節がアクセントとして有核なら後続文節のアクセントの山の高さが抑えられ，先行文節が無核なら後続文節の冒頭が先行文節の最後の高さと同じになり，そのあと上昇させない。しかし，会話や物語の朗読を調べると，実際にそのようにアクセントが弱まっているのが明らかなケースは全体の 6 割程度である（郡 2020，p.209 の図参照）。宮崎では意味の限定関係の働きはそれよりもずっと弱いわけである。

12) 冒頭上昇があるかどうかで下降型・上昇型・平坦型の 3 型の使用割合に差があるかについて正確確率検定をほどこすと $p<0.001$ で統計的に有意な差があると判断される。残差分析の結果では，調整済み標準化残差は冒頭上昇ありの下降型，上昇型，平坦型の順でそれぞれ 1.969 ($p=0.048$)，-6.749 ($p<0.001$)，4.536

表４ 冒頭上昇の有無と音調型との関係

	冒頭上昇あり		冒頭上昇なし	
下降型	158	63%	317	49%
上昇型	15	6%	150	23%
平坦型	69	27%	81	12%
判断保留	9	4%	103	16%

表５ 同じ音調型が２回連続する場合の第２文節での冒頭上昇の有無

	冒頭上昇あり		冒頭上昇なし	
下降型	69	91%	86	72%
上昇型	0	0%	16	13%
平坦型	7	9%	18	15%

冒頭上昇のひとつの役割として文節ごとのくぎりを明確化するということが考えられる。つまり，文節ごとに言いなおそうとする意識があると冒頭上昇が生じるということがありそうだ。さらに，下降型に冒頭上昇をつけると最後が声域としてあまり低くならないですむ，つまり低くて発音しにくくなることを避ける効果もあると思う。実際，同じ音調型が２回連続する場合に，境界音調として２つ目の音節の冒頭上昇だけがある例と境界音調がなにもない例を集計すると，表５のようになっており，他に比べて下降型の連続は冒頭上昇をはさむことが多い[13]。

5.4.2 末尾音調

本稿で認定する３つの末尾音調，すなわち末尾上昇，末尾上昇下降，末尾降下の出現数はそれぞれ 93，62，133 となっている。この３つがどの音調型につくかの割合を，末尾音調がない場合も含めてグラフ化したのが図 11 である。１文節が複数音調単位になっている場合と分類保留例は除いている。

図から，末尾降下は下降型につくことが相対的にではあるが顕著にすくなく，上昇型で多いこと，末尾上昇下降が平坦型で多いこと，末尾音調なしは平坦型ですくないことがわかる[14]。

(p<0.001)といずれも有意で，冒頭上昇ありは下降型と平坦型に多く，上昇型にすくない。

13) 下降型・上昇型・平坦型のそれぞれが連続する割合に差があるかについて正確確率検定をほどこすと p<0.001 で統計的に有意な差があると判断される。残差分析による調整済み標準化残差は冒頭上昇ありの下降型，上昇型，平坦型の順でそれぞれ 3.207 (p=0.001)，-3.322 (p<0.001)，-1.184 (p=0.236)といずれも有意で，冒頭上昇ありは下降型と平坦型に多く，上昇型にすくない。

14) 正確確率検定の結果は p<0.001 で分布に統計的に有意な差（かたより）があると判断される。 残差分析による調整済み標準化残差は，末尾上昇つきの下降型，上昇型，平坦型がそれぞれ 0.501 (p=0.616), -1.504 (p=0.132)，0.933 (p=0.351)，末尾上昇下降つきの下降型，上昇型，平坦型が -0.249 (p=0.803)，1.627 (p=0.104), 1.998 (p=0.046)，末尾降下つきの下降型，上昇型，平坦型が -4.106 (p=0.000), 3.618 (p=0.000),

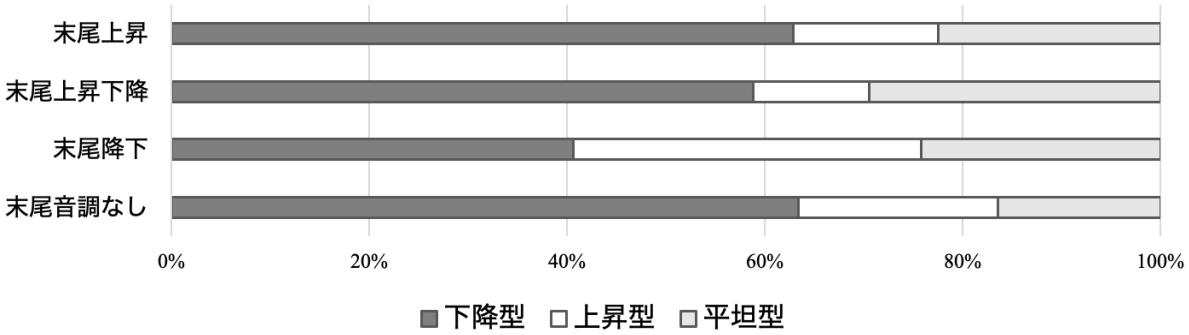

図 11 末尾音調の種類と音調型との関係

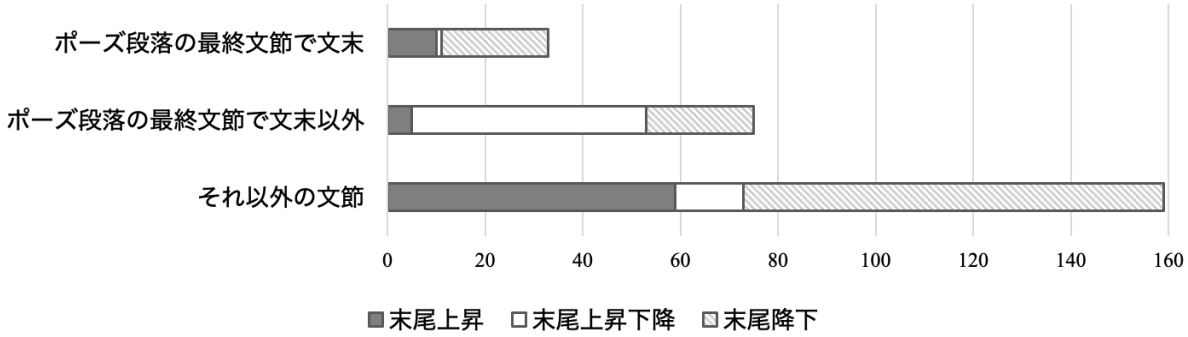

図 12　末尾音調の種類とポーズ，文末かどうかとの関係

また，使われる末尾音調の種類は，ポーズの前（つまり，ポーズでくぎられたポーズ段落の最後）かどうかということと，その文節が形式的に文末かどうかでことなる。この関係をグラフ化したのが図 12 で，ポーズの前であっても文末でない場合は末尾上昇下降が多く，末尾上昇も末尾降下もすくないことが明らかである[15]。

また，３つの末尾音調がつく文法形式（助詞・助動詞の有無と種類）にはかなり明瞭な違いがあり，使い分けがなされているようだ。末尾音調がつく文法形式を，副詞節または並列節の助詞・助動詞（文法的に大きな切れ目），間投助詞，終助詞類，その他の助詞・助動詞，助詞・助動詞がつかない場合，その他にわけてグラフにしたのが図 13 である。以下，個別に見てゆく。

1.386 (p=0.166)，末尾音調なし下降型，上昇型，平坦型が 2.663 (p=0.008)，0.613 (p=0.540)，-2.694 (p=0.007)。本文で述べた以外に末尾降下の平坦型の多さと末尾上昇なしの下降型の多さが有意。

15) 正確確率検定の結果は p<0.001 で分布に統計的に有意な差（かたより）があると判断される。残差分析による調整済み標準化残差は，ポーズあり文末，ポーズあり非文末，それ以外について，末尾上昇は 0.355 (p=0.723), -4.803 (p<0.001), 4.160 (p<0.001) ，末尾上昇下降は -2.972 (p=0.003), 9.718 (p<0.001), -6.906 (p<0.001)，末尾降下は 2.207 (p=0.027), 3.955 (p<0.001), 2.142 (p=0.032)。本文で述べた以外に統計的有意になっているのは，ポーズの前で文末の場合は，相対的に末尾上昇下降がすくなく末尾降下が多い点，そしてそれ以外の場合は末尾上昇と末尾上昇下降が多い点である。

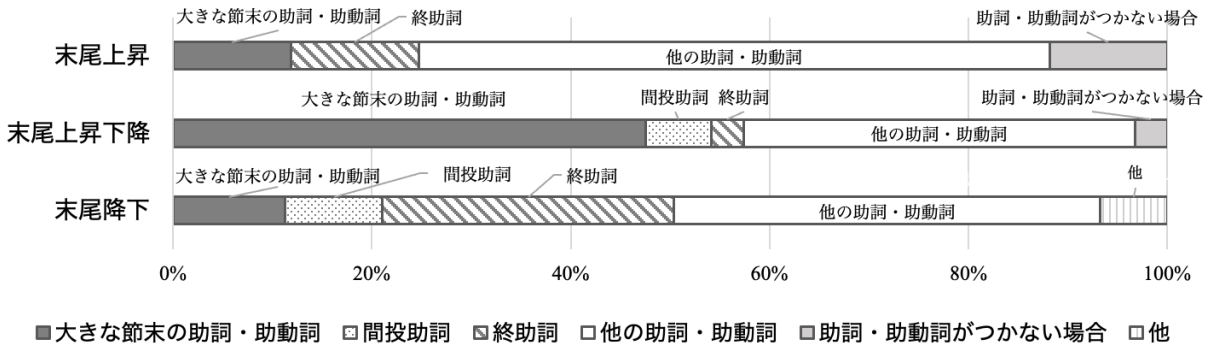

図 13　末尾音調がつく文法形式

5.4.2.1 末尾上昇

具体的に文節末のどのような形式に末尾上昇がついているかを見ると，全 93 例のうち，副詞節または並列節の節末の助詞・助動詞についている場合が 11（うちテ・デが 4），間投助詞（サ，ネ）は 0，終助詞（ナ，ネ，モンネ，ヨネ）が 12，他の助詞・助動詞が 59（うちワ［は］3，ガ 8，デ 6，ニ 10，ノ 6），助詞・助動詞がつかない場合が 11 だった。

終助詞での多さと間投助詞での欠如はそれら固有の音調のためと考えうるが，それ以外はさまざまで，特段の傾向を見出しにくい。この末尾上昇が使われる理由として考えられるのは，助詞の意味を明確にする，あるいは文節のくぎりを明確化するということである。

5.4.2.2 末尾上昇下降

具体的に文節末のどのような形式に末尾上昇下降がついているかを見ると，全 62 例のうち，副詞節または並列節の助詞・助動詞についている場合が 29（うちテ・デが 21，カラが 5），間投助詞（サ，ネ）が 4 と終助詞（ナ，ネ）が 2，他の助詞・助動詞が 25（うち，ワ［は］が 4，格助詞のガが 6），助詞・助動詞がつかない場合が 2 だった（ただし，ダカラ，ソレデという，本来は助詞のもの）。

末尾上昇や末尾降下と比べると，文法的に大きな切れ目，特にテ・デの形の副詞節や並列節の末尾での使用が多いこと，終助詞での使用がすくないことが特徴的である。とくに，5.4.2 節で見たようにポーズの前での使用が多いことから考えると，ポーズがあり文法的に大きな切れ目になっていても，文はまだ完結しておらず次に続くことを明確に示すために使われているのであろう。

前 2 稿の明治・大正世代にはこの動きはあまり見られなかったことを考えると，東京なり共通語の新しい言い方を持ち込んだものかと思われる[16]。

16) 東京でのこの音調の使われ方と来歴については郡(2020a)の p.182f および p.178f 参照。

5.4.2.3 末尾降下

末尾降下と判断した動きは他の末尾音調に比べて上昇型での使用がめだつ。

具体的にどのような形式に末尾降下がついているかを見ると，全 133 例のうち副詞節または並列節の助詞・助動詞についている場合は 15（うちケドが 8，カラが 6，デが 1），間投助詞（サ，ネ）が 13 と終助詞類が 52（ナ，ネ，カナ，ヨの 12 に加えチャ，ヤ），他の助詞・助動詞が 57（提題のワは 2，格助詞のガは 0，グライが 9，カラが 4，トカが 7，引用のテ・ッテが 7，言いよどみ的なナンカのカが 15, 助動詞のミタイナとラシーとタラで 8)，残り 9 は例外的なアクセント的下げと，感動詞あるいはつなぎことば的なマー（まあ），モー（もう）における内部の下げだった。

末尾上昇や末尾上昇下降に比べてめだつのは間投助詞と終助詞類での使用の多さである。また，２音節以上の助詞・助動詞も多い。ここでは終助詞類にはイケルッチャワ（行けるんだ）のようなチャと，オレ ヤキューブヤッタ（俺，野球部だった）のような指定のヤも独特の音の動きをしうるという点で含めている。

5.4.3 境界下降

境界下降，つまり先行文節の最後から後続文節の冒頭にかけての下降と認定した動きは 82 例だが，そのほとんどは先行文節の最後が高い場合である。

そのことを示すのが図 15 で，境界下降に先行する文節の音調型は上昇型が圧倒的に多い。談話全体の中で上昇型は約２割しかないことを考えると，境界下降の上昇型へのかたよりは顕著である。先行文節が下降型の例もあるが，その多くは末尾上昇がついているものなので，末尾上昇で文節の最後が高くなった場合に境界下降がつきやすいということになる。

そして，境界下降の後の音調型については特段の傾向はない[17]。

以上から，境界下降は次の文節を低く始めるために使われていると考えることができる。

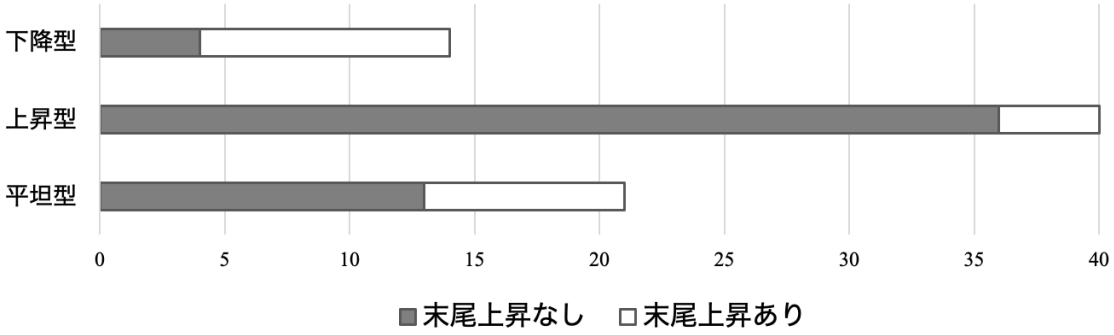

図 15 境界下降の先行文節の音調下降型とそこでの末尾上昇の有無

17) 境界下降の後とそれ以外の場合で３つの音調型の使用割合に差があるかについて正確確率検定をほどこすと，p=0.077 と統計的に有意な差はないという結果になった。

5.5 その他の特徴

5.5.1 １文節が２つ以上の音調単位に分かれる場合

ひとつの文節がふたつ以上の音調単位からなる場合がわずかながらある。それは，補助動詞を含む文節，複合名詞からなる文節など，ひとつの文節が文法的・形態的に一定の独立性を持つふたつの要素からなる場合である。郡(2023)の青島談話については２音節以上の助詞・助動詞が高く始まったり低く始まる場合をここに分類したが，今回それらは末尾音調とみなしている。

補助動詞を含む文節や複合名詞からなる文節がすべて２音調句になるわけではないが，こうしたものは音調的に独立しうるということが言える。同じ傾向は青島談話にも清武談話にも見られた。

以下にそれぞれの典型例をあげる。記号｜は音調単位の境界をあらわす。

・補助動詞を含む文節

モタシテ｜クレル（持たしてくれる：下降型｜上昇型），ミエテ｜クルッテ（見えてくるって：平坦型｜上昇型），ノッテ｜イッタカラー（乗っていったから：上昇型｜下降＋末尾上昇下降）。

・複合名詞からなる文節，長い数詞や接尾辞を含む名詞からなる文節

ユーエム｜ケーノ（UMK［テレビ局］の：平坦型｜冒頭上昇＋平坦型），アリマ｜キネンノ（有馬記念の：下降型｜冒頭上昇＋平坦型＋末尾上昇），オヒル｜ゴハン（お昼ごはん：下降型｜上昇型），ショーガッコー｜ロクネン｜セーン（小学校６年生の：平坦型＋末尾上昇｜下降型｜冒頭上昇＋下降型）

イチマンイッセン｜ゴヒャクエンヤ（11500 円だ：上昇型｜下降型），サン｜ジューハチ┐グライマデ（38［度］ぐらいまで：下降型｜冒頭上昇＋平坦型＋末尾降下）

メンド｜クセーカラ（面倒くさいから：上昇型｜境界下降＋下降型＋末尾上昇）

・長い複合助詞を含む文節

アサゴハントカ｜ドコロジャ（朝ごはんとかどころじゃ：平坦型＋末尾上昇｜上昇型）

5.5.2 高さの動きに特徴がある終助詞類，間投助詞，その他の助詞・助動詞

終助詞類と間投助詞に準固定的な高さの動きがあることは清武談話にも青島談話にも見られた。それは今回の現役世代の談話についても同様である。本稿ではこれらを末尾音調の枠組みであつかっている。

具体的な動きとしては，文末以外の間投助詞はサとネが使われており，サが 12，ネが 8 とがややサの使用数が多いが，もっぱら末尾上昇下降か末尾降下の動きをする。当該の文節の音調型が上昇型か平坦型の場合はとくに末尾降下が多い。つまり間投助詞は高いところから下げることを特徴にしているように見える。

終助詞類のうち使用数が 20 と多いネでは，めだつのは下降型でネが末尾上昇になっている例である。下降型でネ自体の高さの動きがない例もすくなくない。次に多い終助詞類ワの 7 例（後述するチャワのワをのぞく）については，下降型でワ自体の高さの動きがない例がめだつ。

その他の助詞・助動詞にも高さの動きに特徴があるものがいくつかあるのが今回の現役世代の話者の特徴である。とくに 5.4.2.3 節で述べたような末尾降下をともなう助詞がめだつ。具体的には 2 音節以上のクライ・グライ，トカ，ミタイナなどである。これらについては前稿では別の音調単位をなすものとしてあつかったが，直前に対して低くつく場合と，助詞・助動詞の冒頭から下がるために頭高型であるかのように聞こえる場合がめだつが，自分独自の動きを持たないように見える場合がある。

このほか，引用のテ・ッテは 15 例のうち 6 例，引用のトは 13 例のうち 4 例と，末尾降下している例がめだつ。これらはいずれも直前が高い場合であり，直前が上昇型であったり末尾上昇がついていて高い場合 12 のうちの実に 10 例で末尾降下している。この下げは引用という文法的な働きを明確化するのに使われているように思える。

副詞節または並列節の末尾のテ・デの上昇下降の動きも多いが，同じ働きのカラも同様の動きをするので，上昇下降はテ・デ自体ではなく，大きな単位のくぎりという文法的なはたらきをする音の動きなのだろう。副詞節または並列節の末尾では末尾降下になっている例もすくなくないが，これはケド，カラに見られる。

・チャ・ヤの高さの動き

フートーニ ナマエト ジューショガ カイテアルッチャワ（封筒に名前と住所が書いてあるんだよ）や デ ダイジョーブヤッタト（で，だいじょうぶだったの？）のような日向方言に特徴的なチャとヤもかなり固定的な高さの動きをもっている。

具体的には，チャやヤを直前よりも低くつける例がめだつ。直前の音節を高くすることもある。チャについてはヤとの複合形をのぞく 28 例のうち 11，ヤについてはチャと複合形しないヤッタ，ヤッテ，ヤロの形で 8 例のうちの 4 がそのようになっている。具体例として，カンタンニ イケル┐ッチャワ（簡単に行けるんだ：直前まで下降型），ダンボー ツケ「タ┐ッチャワー（暖房をつけたんだ：直前まで上昇型）。デ ダイジョーブ┐ヤッタト（で，だいじょうぶだったの？：直前は上昇型），ナン┐ヤロネ（暖房をつけたんだ：直前は上昇型）。なお，ヤだけの形の使用は 8 例のみで，そこには特別な動きはなかった。

このほか，チャやヤ自体を高くしてそのあとを低く続ける例もそれぞれ 2 例および 1 例（ヤッタの形で）ある。具体例として，ナカ「ト┐カデ スルッ「チャ┐「ネ（［勉強を電車の］中とかでするんじゃない？：直前は下降型），メッチャ タイヘンヤ┐ッタシー（すごく大変だった：直前まで上昇型）。

使用例の残りは，当該文節全体が下降型になって，とくにチャやヤでの動きが感じられないものである。具体例として，ジューショガ カイテアルッチャワ（住所が書いてあるんだよ：先行文節が上昇型で，チャを含む後続文節が下降型），オレ ヤキューブヤッタ（俺，野球部だった：先行，後続とも下降型）。

ヤとチャが複合する例では，ヤの直前で下がることが多いが，全体が下降型になって，とくにチャやヤでの動きが感じられない場合もある。10 例のうち，ヤの前で下がるのが 7 例，具体例として，オレラモ イギリ「ス」ヤッタチャワー（俺らも［ホームステイ先が］イギリスだったんだ：先行文節が上昇型，当該文節が下降型），チャやヤでの動きが感じられない例としては，テンマンバシノ ツギガー タカマツバシヤッチャワ（天満橋の次が高松橋なんだよ：先行文節が平坦型，当該文節が下降型）。

5.5.3 その他の特徴的な高さの動き

・ナンカ

ナンカ サンバイグライ イッテー（なんか3杯ぐらいいって）のような適切な表現をさがす際につなぎことば的に使われるナンカが 25 例出てくる。そのうち 15 例はナンで上昇し，カで下降する動きをとっており，固定的とは言えないまでもかなり特徴的な動きをすることが多い。本稿ではこの音の動きについて，音調型は判断保留とし，最後の下げを末尾降下に分類した。

・マー，モー

マ オモシレー コトワ オモシレーケドネ（まあ，おもしろいことはおもしろいけどね）や マーイロイロ ホン ヨンダリトカー（まあ，いろいろ本読んだりとか）のように，適切な評価をくだそうとする際の，あるいは適切な表現をさがす際のつなぎことばマー・マ（まあ）が 45 例出てくる。そのうち 4 例にすぎないが，明らかに内部で上昇してからすぐに下降する動きをとっているものがある。また，モー ウメマステ ユッテー（もう埋めますって言って）のようなモー（もう）は 9 例だがそのうち 2 例も同じ高さの動きをしている。本稿ではいずれも音調型は判断保留とし，最後の下げを末尾降下に分類したが，全体の音の動きとして上述のナンカと共通であり，つなぎことば的な役割をもつ音形なのかもしれない。

6 まとめ，清武談話，青島談話との比較，読みあげ文との比較

6.1 まとめと，清武談話，青島談話との比較

無アクセント方言である日向方言の中部地域の談話のイントネーションについて，前 2 稿の清武，青島の明治・大正生まれの話者に引きつづき，今回は 1990 年生まれの現役世代の男性話者による会話資料を検討した。

結果として，談話音調は今回の資料でも基本的に文節ごとの高さの動きの方向性として単調

下降（下降型），単調上昇（上昇型），平坦（平坦型）の３種の音調型と，いくつかの種類の境界音調との組みあわせとして音声的に記述できそうであることがわかった。
・音調型として下降型が多い点も明治・大正生まれの話者とおなじである。ただ，今回の現役世代の話者の特徴として，下降型がポーズの前で顕著に多いこと，そして，対比を含め強調の意味が加わる文節で上昇型が使われている例が目だつことが特徴としてあげられる。平坦型は上昇型との共通点もあるが，独自の明確な特徴は見えなかった。可能性として平坦型は下降型の下降度が小さいものと上昇型の上昇度が小さいものの集合体だということも考えられる。
・連続する２文節に意味的な限定関係がある場合は途中に境界音調をはさまずに同じ型の文節が続いて１音調句になる傾向があるが，これは明治・大正生まれの話者と同じである。
・境界音調は今回の現役世代の話者はさかんに使っている。とくに，文節の末尾での上昇下降と降下の使用がめだつ。そして，この末尾上昇下降と末尾降下，そして境界下降は文法的・語彙的な機能をはたすために使われているようだ。

具体的には，末尾上昇下降はポーズの前の副詞節や並列節の末尾での使用が多く，文がまだ完結しておらず次に続くことを明確化するために使われているものと思われる。末尾降下は特定の助詞・助動詞がもつ準固定的な高さの動きとして使われているものと思われる。境界下降は次の文節を低く始めるために使われていると考えることができる。
・準固定的な高さの動きをもつ言語形式としては，終助詞類と間投助詞，そして日向方言に特徴的なチャ・ヤを含めいくつかの助詞・助動詞がある。その点も明治・大正生まれの話者と同じだが，どの助詞・助動詞がどのような動きをとるかについては同じではない。今回の話者では間投助詞のサ・ネは高いところから下げること，終助詞のネは文節が下降型でネが末尾上昇になる例がめだつこと，クライ・グライ，トカ，ミタイナは末尾降下で直前に対して低くつくか助詞・助動詞の冒頭から下がる場合がめだち，引用のテ・ッテ・トも末尾降下する場合がめだつ。チャ・ヤは直前よりも低くつける例がめだち，この方言に特徴的な音の動きだと感じられる。また，つなぎことば的な役割をもつナンカには上昇してから下降する動きがめだつ。
・１文節が２音調句からなる例が，補助動詞を含む文節，複合名詞からなる文節などに見られるが，これは明治・大正生まれの話者と同じである。

6.2 同じ話者による読みあげ文の高さの動きと談話で見られる傾向の比較

同じ話者の読みあげ調査の資料からいくつかの文の高さの動きを示し，談話で見られた傾向と比較する。読みあげと言っても，いくつかの文では事前に提示した共通語文を自分自身の言い方になおして，実際に話す場面を想像しながら発音していただいたシミュレーション発話になっている。

(1)「ゆうじはひとりでビールを４本飲んだ」（図 14）

５文節からなる長めの文の高さの動きを，物理的な高さの動きがなるべくとぎれないように有声子音を多く含む語を使って見ようとした調査文である。

冒頭の提題文節は上昇型で，続く２文節で下降と上昇が繰り返され，最後の２文節が上昇型＋下降型になっている。フォーカスは最後から２文節目の「４本」に置いて発音しやすいであろう。提題文節やフォーカスがある文節は上昇型をとりやすいことが談話資料で見られた傾向だが（5.2.5 節），それと合致する。文末が下降型である点も談話資料と同じ。

(2)「ねずみ／野良犬がいる」「ねずみ／野良犬はいない」

a. なにかを気にしている人に「どうしたの？」と聞いた答えとしての「ねずみ／野良犬がいる」（図 15）

b. なにかいることはわかったが，それがなにかを聞く「なにがいる？」に対する答えとしての「ねずみ／野良犬がいる」（図 16）

c.「ねずみ／野良犬はいるの？」に対する否定の答えとして「ねずみはいない」（図 17）

文の中で何が提題か，そして何がフォーカスかという情報構造と音の高さの動きの関係を見ようとした調査文セットである。方言形にした質問文を読んでそれに自分で答える形で発音していただいている。質問と答えのセットを何度か繰り返して発音していただき，その高さの動きをネズミのミの冒頭またはノライヌのヌの冒頭でそろえて重ねる形で図示した。

a は文全体にフォーカスがある発話と考えられるが，第１文節が平坦型，第２文節がゆるやかな下降型をとっている。b は第１文節にフォーカスがある発話になると考えられるが，そこはゆるやかな上昇型で末尾上昇がつき，第２文節が大きな下降型をとっている。c は第１文節が提題文節になっている。ここでも第１文節はゆるやかな上昇型だが，末尾上昇はついておらず，文節境界で下降したあと第２文節は下降型をとる。このように，情報構造が文の高さの動きに反映されていることがわかる。

(3)「これが南大東島で，それが宮古島だ」（図 18）

対比の言い方を見ようとした調査文だが，上昇型と下降型を組み合わせる形になっている。会話で見られた傾向と同じである（5.2.5 節）。

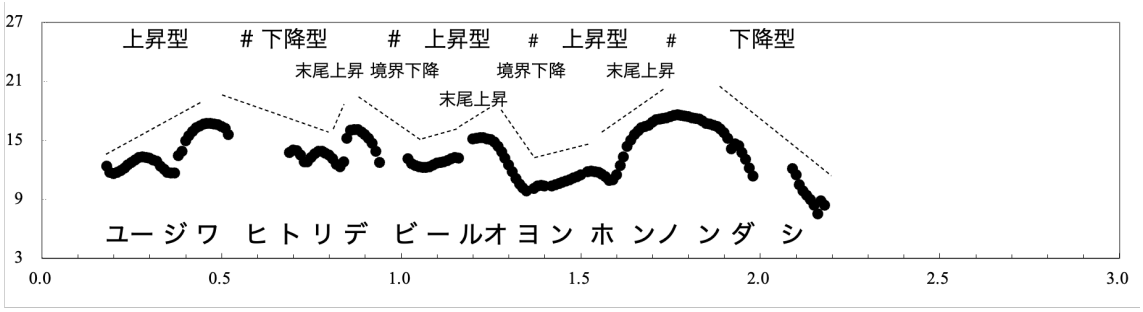

図 14　「ゆうじはひとりでビールを４本飲んだ」

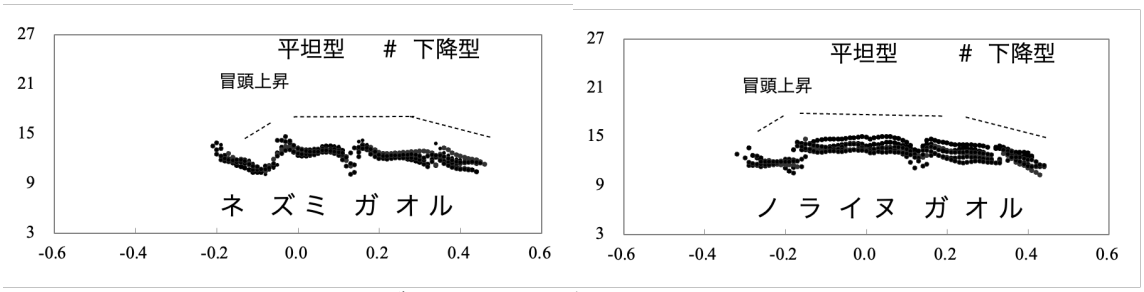

図 15　「ねずみ／野良犬がいる」（全文フォーカス）

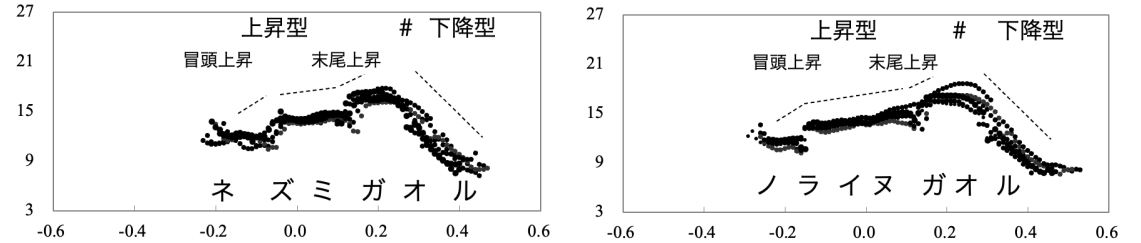

図 16　「ねずみ／野良犬がいる」（第１文節にフォーカス）

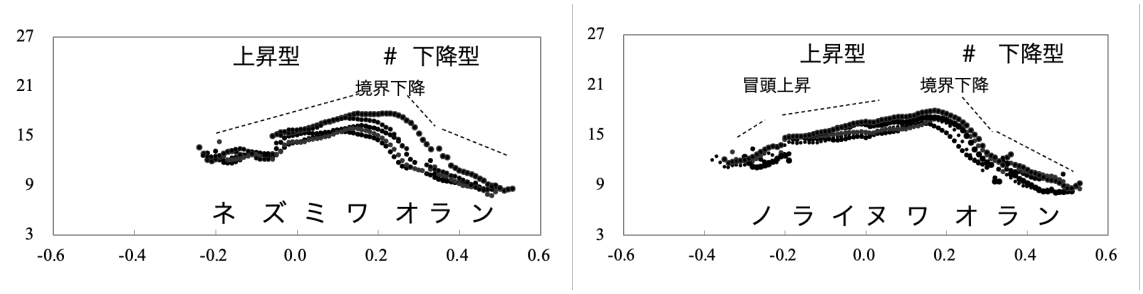

図 17　「ねずみはいない」

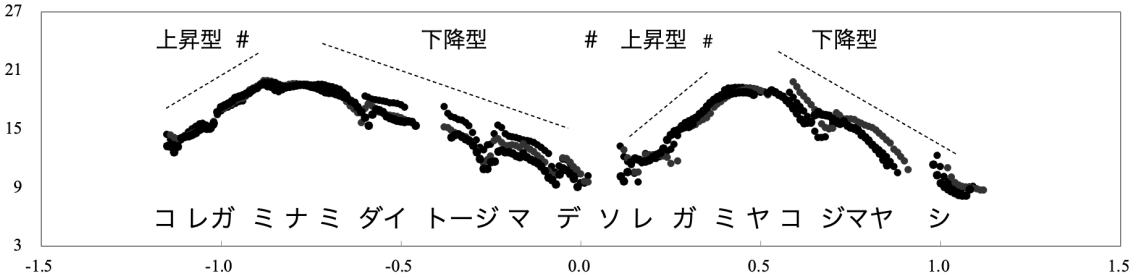

図 18　「これが南大東島で，それが宮古島だ」

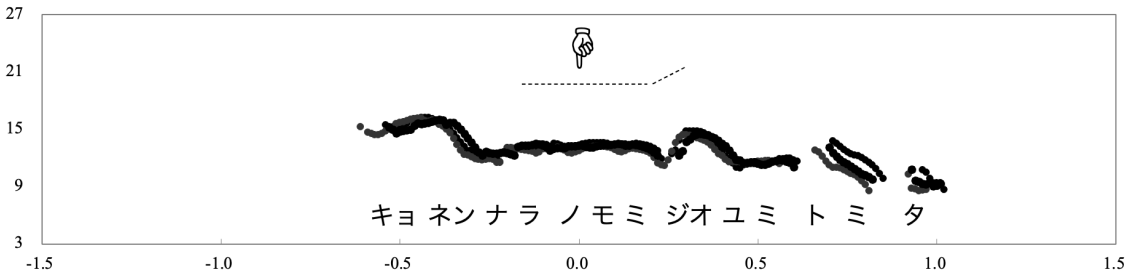

図 19　「去年奈良のもみじを由美と見た」

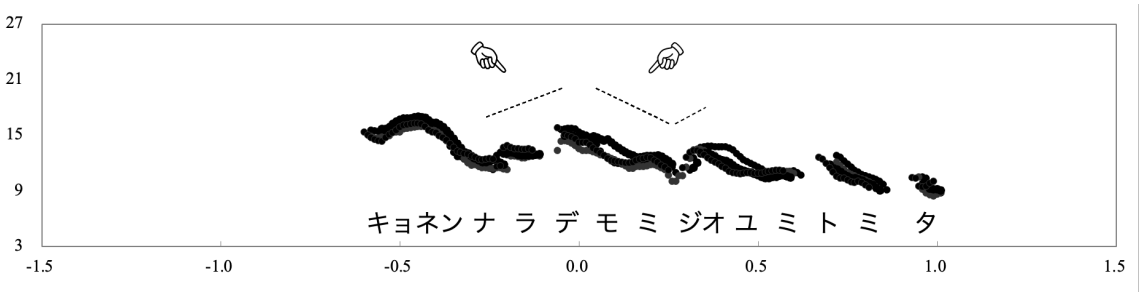

図 20　「去年奈良でもみじを由美と見た」

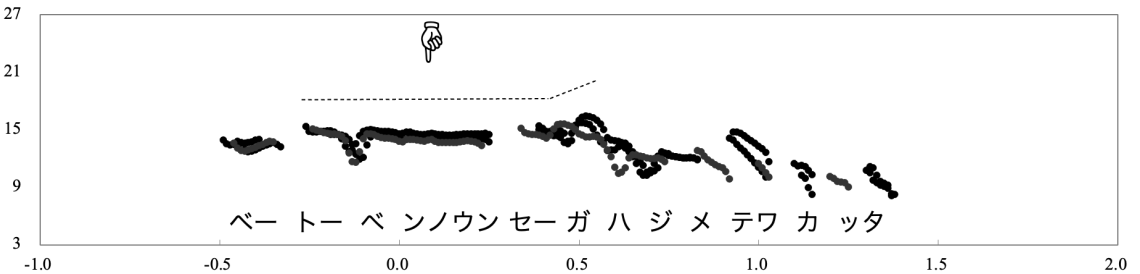

図 21　「ベートーベンの運勢がはじめてわかった」

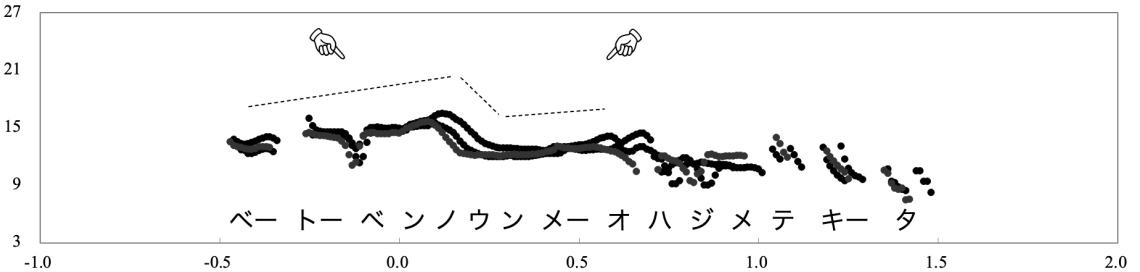

図 22　「ベートーベンの運命をはじめて聞いた」

(4)「去年奈良の／でもみじを由美と見た」

意味の限定関係の作用を見ようとした調査文セットである。複数回の発音をモミジの冒頭でそろえて重ねている。

a. 「去年奈良のもみじを由美と見た」（図 19）

b. 「去年奈良でもみじを由美と見た」（図 20）

「奈良の」と「もみじ」の間に意味の限定関係がある a では，その 2 文節が平坦型が連続す

る 1 音調句になっており，「奈良で」と「もみじ」に限定関係がない b では上昇型と下降型という異なる音調型に分かれている。会話では意味的限定の有無がイントネーションを左右する要因になっていることを見たが，その関係はかなりゆるやかだった（5.3.2 節）。文の読みあげでは，ここに示した発話以外でも意味の限定関係があればおおむね 1 音調句になっていた。

(5)「ベートーベンの運勢がはじめてわかった」「ベートーベンの運命をはじめて聞いた」

意味の限定関係の作用を見ようとした別の調査文セットである。複数回の発音をウンメー，ウンセーのンの冒頭でそろえて重ねている。

a. 「ベートーベンの運勢がはじめてわかった」（図 21）

b. 「ベートーベンの運命をはじめて聞いた」（図 22）

「ベートーベンの」と「運勢」の間に意味の限定関係がある a では，その 2 文節が平坦型が連続する 1 音調句になっており，「ベートーベンの」と固有名詞である曲名の「運命」の間に限定関係がない b では上昇型＋境界下降＋上昇型という異なる音調型に分かれている。

(6)「有名なおみやげ屋さんで珍しいおみやげを買った」（図 23, 24）

音節数の多い長い文節を使って文節内の高さの動きを明瞭な形で見ようとした調査文だが，ここでは共通語形で読んだ発音を 2 例示す。2 例の違いはわずかだが，「おみやげ屋さん」の最後のサンデで末尾上昇する前のミヤゲヤの動きが，図 23 ではゆるやかな下降型，図 24 では平坦型になっている。これは 6.1 節で可能性として述べたような平坦型と他の型の相通性を裏付けるものだが，下降型が談話でも多数派であることを踏まえると，このようなバリエーションが生じる理由として，図 23 の下降型が基本形であり，図 24 の平坦型はサンデの末尾上昇にミヤゲヤの動きがひきずられたもの，つまり，末尾で上昇させることを意識して，それを先取りする形でミヤゲヤを下げないでおいた，という解釈ができそうに思う。

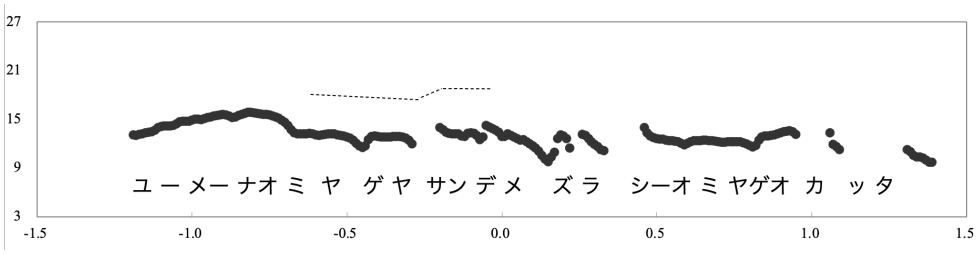

図 23　「有名なおみやげ屋さんで珍しいおみやげを買った」発音 1

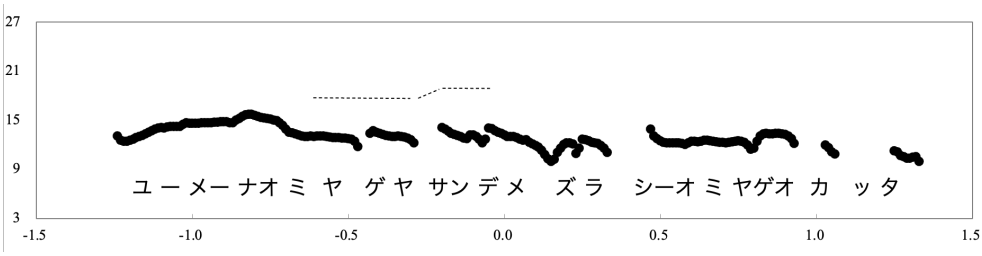

図 24　「有名なおみやげ屋さんで珍しいおみやげを買った」発音 2

7 現役世代の話者の談話音調の大枠を説明する暫定的なモデル

談話と読みあげ資料ここまでの分析の結果を踏まえると，本稿で分析の対象とした現役世代の話者の談話音調の大枠は，以下に示すようなモデルで説明できそうに思われる。

まず，前提として以下を想定する。

・基本的に文節が音調の単位となっている。意味的な限定・被限定の関係があるときなどには２文節以上が１音調単位になりうる。

・音調単位の高さの動きは，おおむね直線的な動きをする主音型と，その前後につく境界音調の組み合わせでできている。

その上で，以下のように考える。

①音調単位（≒文節）ごとにその冒頭と末尾の高さがほぼ決まっていて，音調単位内の基本の高さの動き（主音型）はそれをおおむね直線的につないだものである。

②冒頭は末尾より高いのがデフォルトである（4.2.4 節参照）。したがって各音調単位の基本の動きは下降形の音型をとる（図 25(1a)）。本稿で下降型と呼んだものである。

ただし，実際には通常の声域内であっても高めの声をいきなり出すことはできない[18]。そのため，ポーズ段落の冒頭や単語の単独発話では冒頭で物理的にすこし上がってから下がる形をとりやすいだろう（図 25(1b)）。この上昇が本稿で冒頭上昇と呼ぶものである。

この上昇のしかたは急激である必要はない。ゆっくりであれば中央がふくらむ音形になるだろう[19]。

③音調単位の末尾が冒頭より高くなり，上昇形の音型をとることがある（図 25(2a)）。本稿で上昇型と呼んだものである。強意が感情が加わる場合によくあらわれる。上昇型でも冒頭が通常より低い場合もあれば，末尾が通常より高い場合もあるだろう。

音調単位の末尾がなんらかの理由で冒頭と同じ高さをとる場合は平坦形の音型，本稿で平坦型と呼んだ音型になる（図 25(2b)）。

④デフォルトである下降型の音調単位が連続する場合，後続単位の冒頭で上げなければならないが，やはりすぐには高くできないのでそこに冒頭上昇が生じる（図 25(3)）。これは談話でよく見かける動きのひとつである。

---

18) 歌唱においても，ある程度高い音の声を出すときは物理的には低くから始まってずりあがる形になっているのがふつうである。通常はそのずりあがりの時間が短いために耳はその上昇を感じない。

19) 岩本(1983)が（おそらく単独発話の）単語について「宮崎市近郊では（中略）三拍以上は大体において初めと終りが低めで，中間がやや膨らみ気味に高くなる」と言うのはこの音形であろうと思う。

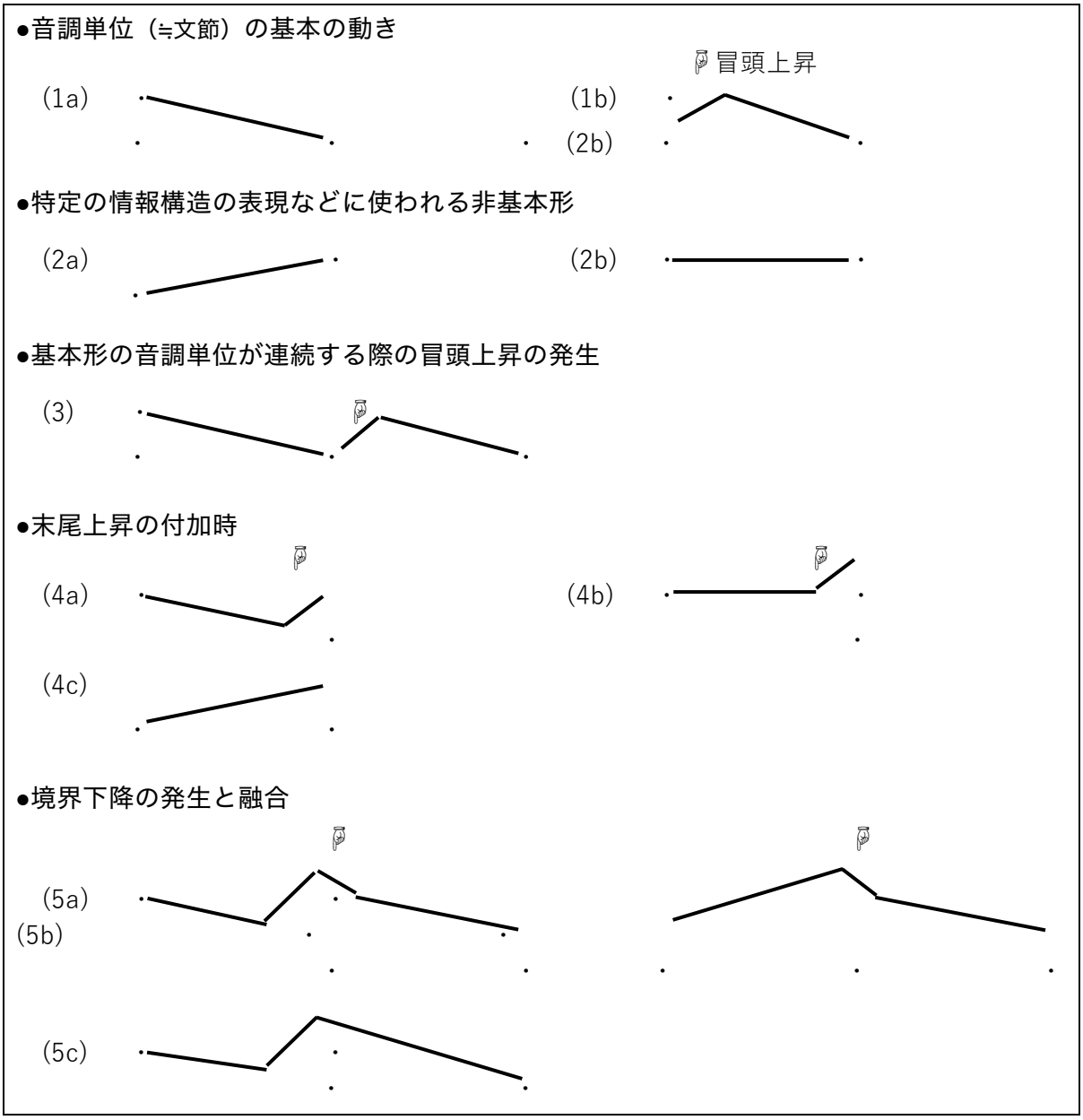

図 25　宮崎市およびその周辺の談話音調のしくみ（暫定モデル）

⑤実際の言語運用では文節の末尾（ほとんどの場合助詞）を高くすることがある。本稿で末尾上昇と呼んだものである。それは助詞の意味を明確にするためかもしれないし，文節のくぎりを明確化するためかもしれない（5.4.2.1 節）。あるいは後続文節の冒頭の高さを前倒しの形で実現する場合もあるかもしれない。

この場合，当該文節は下降型のまま末尾だけを高くしてもよいが（図 25(4a)），それ以前の区間が末尾の高めを先取りする形で平坦型になることがあると考える（図 25(4b)：5.3 節の最後参照）。あるいは，合体して上昇型になることもあると考える（図 25(4c)）。

⑥主音型が下降型でも末尾上昇が大きい場合や平坦型に末尾上昇がつく場合，あるいは主音型が上昇型で末尾が通常より高い場合は，そこから後続音調単位の冒頭まで下げることが必要になる（図 25(5a) (5b)）。この下降が本稿で境界下降と呼んだものである。

ただし，境界下降と後続文節の下げが融合することもある（図 25(5c)）。

⑦副詞節・並列節の最後など大きな切れ目には音調単位の末尾に上昇下降の動きをつけることが多く，特定の助詞・助動詞は下降の動きをとることがある。

現実の談話における主音型と境界音調の選択のしかたは上に記したような言語的および非言語的な要因できまる部分もあるが，同時に高い自由度もあるように見える。はたしてどこまでが自由と言えるのかの検討が今後の課題のひとつである。平坦型の位置づけについても十分考える必要がある。

ただ，大枠で言えばこのモデルは前 2 稿でとりあげた明治・大正生まれの話者の談話音調も説明できそうに思われる。現役世代の他の話者についても，このモデルが適用できるか，改善すべき点はどこかを含め，ひきつづき検討してゆきたい。

文献

岩本実(1983)「宮崎県の方言」『講座方言学 9 ―九州地方の方言―』267-293，国書刊行会.

郡史郎(2020a)『日本語のイントネーション―しくみと音読・朗読への応用』大修館書店.

郡史郎(2020b)「日本語の助詞･助動詞類のアクセント―一覧と使い分け，変化の方向性―」『音声言語の研究 14』（大阪大学）13-24. https://doi.org/10.18910/77063

郡史郎(2022)「宮崎清武町における『無アクセント方言』の談話音調」『音声言語の研究 16』（大阪大学）1-18.　https://doi.org/10.18910/88404

郡史郎(2023)「宮崎の『無アクセント方言』の談話音調―青島地区の場合―」『音声言語の研究 17』（大阪大学）17-33.　https://doi.org/10.18910/91571

旧稿の訂正

郡史郎(2023)「宮崎の『無アクセント方言』の談話音調―青島地区の場合―」p. 33, l. 5f

誤：　内陸部でもともとの主たる生業が漁業（青島）か，海岸部で農業（清武）か

正：　内陸部でもともとの主たる生業が農業（清武）か，海岸部で漁業（青島）か